

派遣先所属 宮城県医療政策課
氏 名 沓澤 俊夫 (くつざわ としお)
派遣期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

(1) 医療政策課・医療人材対策室

派遣2年目となる医療政策課は、医療人材対策室とともに、地域医療計画、医療法人許認可、県立病院、人材確保等、医療政策の広範囲にわたる業務を行っています。今年度は、台風19号対応や拡大しつつある新型コロナウイルス等の負荷も大きいところです。

課・室合わせて9班の組織編成で、職員数は50人(2月1日現在、臨時職員含む)の大所帯で、このうち2人が応援派遣職員(広島県、埼玉県)として、地域医療再生基金事業に係る各種事業の執行等の業務に携わっています。

東日本大震災により宮城県では病院の約7割、全医療機関の約4割が被災し、300億円超の被害がありました。このような状況からの復興に向け、地域医療再生臨時特例基金約800億円等により被災医療機関の再建が進められ、地域の中心となる医療機関の内陸・高台への移転新築(気仙沼市立病院, 石巻市立病院, 町立南三陸病院)や、創造的復興としての医学部新設などがなされてきました。令和元年度は、復興計画10年間のうち9年目となり、発展期2年目として、医療分野においてもそれぞれ集大成に向けた業務執行に努めているところです。



©宮城県・旭プロダクション
医師確保PRキャラクター「ドクターむすび丸」

【医療政策課】(6班・31人)

企画推進班(地域医療計画等)、調整班(予算決算、庶務)、医務班(病院等医療法人の許認可・医療相談等)、病院事業班(県立病院・こども病院)

地域医療第一班 救急医療、災害医療、周産期医療、原子力災害医療 <応援職員1人>

地域医療第二班 在宅医療、へき地医療、小児医療、医療機関復旧支援等 <応援職員1人>

【医療人材対策室】(3班・19人)

医師定着推進班(医師確保等)、医療環境整備班(勤務環境改善等)、

看護班(看護師確保対策等)

(2) 地域医療第一班と災害時医療

私の属する地域医療第一班は今年度1人減の7人となりましたが、救急医療・原子力災害医療を担う3人と、災害時医療・周産期医療を担う3人の2つのグループで、定期的に事業進捗の情報共有を行い、協力し合いながら業務をすすめています。県内医療機関への各種補助金や研修などのほか、女川原発に係る避難計画の調整等、毎議会で質疑がある事務もあるところです。

私は2年目も災害医療担当の1人として、引き続き災害医療コーディネーターや災害医療支部体制、MCA無線、SCU（広域医療搬送拠点）計画などのほか、災害時対応マニュアルの改定、各種災害対応訓練の準備・調整、災害医療に係る人材の育成・研修等に係る業務を分担しています。

今年度は、新潟県での参集訓練も含め8つの訓練が行われました。恒例の6. 12や9.

1の総合防災訓練のほか、2年に1回の仙台空港航空機事故対処の実動訓練などについてDMATの参加調整等を行いました。

また、昨年度達成できなかった黒川地域の災害時医療体制づくりやSCU計画の調整などにも、取り組んでいるところです。

9月上旬の首都直下地震を想定した政府訓練では、13病院のDMATチームが千葉県に参集し

訓練に参加。訓練を終えた次の日に台風15号が上陸し、間一髪での宮城県帰還もつかの間、10月12日から台風19号の対応になってしまいました。2年目も訓練や研修では試行錯誤・反省の連続でしたが、いきなり災害対応の本番に突入することになってしまいました。6月に行った災害医療本部の初動訓練の反省点や課題も充分こなせていないうちに、その空白部分を突くように、本部スペース準備・情報収集・派遣調整等の課題が次々に降りかかってきました。



仙台空港での訓練

訓練ではマニュアルの一部しか行っておらず、次回の訓練企画で行おうと考えていた様々な事項が、見事に問題となりましたが、災害医療コーディネーターの先生方のネットワークや県外からの応援部隊などに助けられ、なんとか医療救護対策については10月末にミッションを終えることができました。

今回の災害対応の検証・課題・提案などについて、マニュアルへの反映や研究に取り組むとともに、タイムラインや訓練の改善などを進めるほか、昨年度の北海道派遣の数倍の規模の災害救助法の求償事務をこれから処理していくところです。

医療関係の災害対応が一段落したあとも部内をあ



災害医療コーディネート研修 地域俯瞰

令和元年度の主な災害医療業務

1災害対応等	<ul style="list-style-type: none"> ・台風19号対応と総括、求償事務 ・保健医療調整本部に係る調整 ・オリパラに係る集団災害対策の調整
2組織体制充実	<ul style="list-style-type: none"> ・大規模災害時医療救護活動マニュアル改定 ・災害医療コーディネーター体制(26人) ・地域災害医療8支部、DMAT(51チーム)
3基盤整備等	<ul style="list-style-type: none"> ・災害拠点病院(16病院) ・情報通信基盤 ・SCU計画、航空搬送拠点
4災害対応訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・東北ブロック参集訓練(新潟県) ・仙台空港航空機事故対処訓練等 8訓練の参加調整・補助
5研修・人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ・研修実施 4事業(災害医療従事者向け、医療救護班向け等) ・研修参加 10事業



台風19号対応の災害医療本部

げでの避難所運営の支援などが続きました。課内でこの応援割り当てがなかったこともあり、11月下旬の日曜日に、台風で甚大な被害のあった丸森町に、電車とバスを乗り継いで初めて個人ボランティアに参加しました。



丸森町の被害状況とボランティア活動

期間降雨量が600mmを超えた、奥地の筆甫地区での民家の土砂撤去を行う14人の班に割り当てられました。この日がこの地での活動初日とのことでした。コンクリートの橋が完全に破壊され、大きな石の群れが川を埋め尽くして、改めて自然の猛威を実感することとなりました。こ

こでもコミュニティの力や全国各地からのベテランボランティアの方々が大きな役割を果たしていました。

海も山も、自然の猛威が及ばないところはないような状況が続いている我が国では、各自が想像力を膨らませて常に備えることは勿論、災害医療からその後の様々な支援、長期のボランティアの態勢まで、法制度や予算等、全く新たな対処が必要な局面を迎えているように思えます。

2 被災地の復旧・復興の状況

宮城県の沿岸地域の復興には震災の年にボランティアバスで訪問したこともあり、特別な想いがあります。

新年度の体制も少し落ち着いてきた4月下旬、3度目の女川訪問をしました。昨年夏は台風、2月は大雪でこれまで駅前「シーパルピア女川」辺りしか巡れませんでした。今回は春めいてきた港内のあちこちを散策し、NHKで放送された「いのちの石碑」等もいくつか見ることができました。

小学校卒業間際で被災した子供たちが中心となって、『1000年後のいのちを守ろう』と、津波が到達した21カ所に「いのちの石碑」を建てる活動を続けています。それぞれの石碑には当時児童達で作った句が刻まれていて、妻も感慨ひとしおのようでした。



女川町の港を望む高台の神社にて

四季を通じて塩釜、野蒜、東松島、石巻、女川などと沿岸各地を訪れ、今年2月上旬、最後の家族の旅に選んだのは南三陸・気仙沼の地でした。南三陸では地元のホテルが主催する「語り部バス」に案内され、このホテルが独力で守っている震災遺構のブライダル会館の見学などをしました。とっさの判断でお客を誘導し、辛うじて4階屋上で20mを超す津波から300人あまりのお年寄りを守り抜いた話は、遺構の凄まじさと相まって特に印象に残りました。



南三陸町の復興と伝承

されこの業務についているとのことでした。とてもおだやかに情感を込めてありありと語っていたその方が最後に述べられたのは、「私の話を聞いていただいた皆さんも、新たな語り部です。」との言葉でした。

ここでは防災対策庁舎の遺構を中心に復興公園の整備が進んでいますが、この民間遺構は整備計画とうまく調整ができておらず、今後の維持管理等を悩まれているとのことでした。名取市の閑上地区でも同様に水産加工会社が震災遺構として保存してきた建物をやむなく取り壊すニュースが一昨年流れました。このような民間企業の伝承への想いも生かされる態勢が切に望まれるところです。

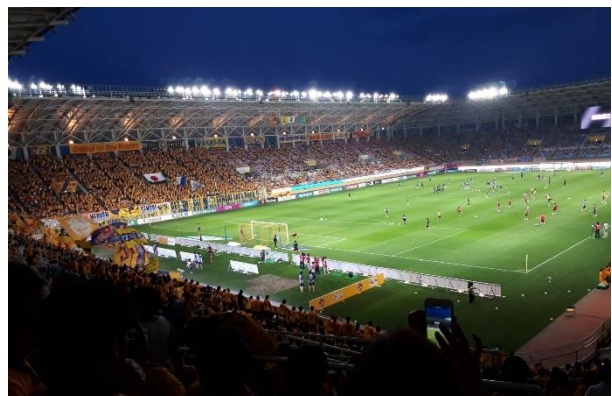
今回の語り部さんは、震災当時は新潟県にいて震災復興の手伝いをしているうちに宮城県で定着された方でした。女将に「被災された地元の方々のお話を聞いてこれを伝える人も『語り部』です」と説得

3 被災地へ派遣となって感じていること～東北5年の万感の想い～

宮城県2年目も休みの日を中心に、家族や友人などと県内各地を楽しみました。

5月中旬、山の先輩が来仙し、新緑の泉ヶ岳に登りました。レンタカー利用でしたので翌日は地元で人気が高い、仙台西部にある定義如来を見物しました。平家の落人伝説の伽藍や、全国からの寄進で立てられた五重塔は見応えがあり、先輩は感心しきりでした。

7月中旬、塩釜港祭りを2日にわたり家族と見物。今年は天候に恵まれたため、花火や船の巡幸がとても鮮やかでした。8月中旬、仙台七夕のほか、仙山線で足を伸ばし、山形花笠祭りも訪ねました。また下旬にはベガルタ仙台の熱いサッカー観戦も体験し、充実の夏を過ごすことができましたが、一転して10月は台風19号対応の日々でした。県内の甚大な被害に心を痛めながらも、ラグビーワールドカップの日本躍進にせめても勇気づけられることもありました。



熱い声援のベガルタ仙台ホームゲーム

12月には妹夫婦や家族が入れ替わり定禅寺通りのイルミネーションを目的に来仙し、慌ただしい職場を尻目に年休をいただき、松島や塩釜、多賀城などを案内して回ることとなり、一緒に思いっきり楽しんだりもしました。

1月中旬から全国公開となった岩井俊二監督の「ラストレター」は、白石や仙台の街でふんだんにロケをした映画です。青葉城下の広瀬川沿いのカフェや県庁近くの国分町の飲み屋などでも印象



映画「ラストレター」のロケ地巡り

的なシーンが撮影されており、多くのファンの巡礼が続いているところです。私も妻とともに、ロケ地案内のパンフレットを片手に、映画の世界にしみじみ浸りながらあちこちを巡っています。

福島県の3年と宮城県の2年、仕事や旅行、日々の生活の中で多くの方々に出会いました。公務員生活の終わりにかけがない時を体験させていただきました。東北での5年間に万感の想いを込めて、最後の日々を噛みしめ噛みしめ、過ごしております。

(令和2年2月作成)